2013年02月18日 中日新聞 朝刊 25頁

備える 3.11から　第63回　**なぜ逃げない**

危険迫っても「私は大丈夫」

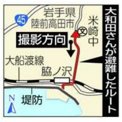
津波が目の前に押し寄せているのに、ぼうっと立っていて避難しない人たち。東日本大震災の発生時、各地でそんな姿が目撃されている。「自分がこんな異常事態に遭うわけがない」と目の前の現実を否定する心理を「正常性のバイアス（偏見）」と呼ぶ。東日本大震災から間もなく二年。「喉元過ぎて熱さを忘れ」、同じ悲劇を繰り返してはならない。

（中村禎一郎）

津波を撮影 岩手の消防団員

考えなくても体動くように

Ⓓ震災の映像と同じ道路＝岩手県陸前高田市で



大和田さんが避難したルート

陸前高田市消防団
米崎分団第一部

夜警に出た団員を迎える大和田さん㊥。今も消防団活動を続ける＝岩手県陸前高田市で

津波がまもなく押し寄せる堤防の上。岩手県陸前高田市の消防団員大和田祐一さん（四〇）は携帯電話で動画を撮影していた。強い揺れから三十分後。「津波を見たことがなかったから」。危険だと気付いたのは、波が高さ五メートルの堤防の下までたどり着き、徐々に上がってきた時だった。「やべえ、堤防を越えてくる」

近くのポンプ車に飛び乗り、海から二百メートル離れた高台方向へ走らせた。右後ろに視線をやると、波に持ち上げられた船が宙に浮いているように見えた。

その途中、ポンプ車から住民に必死に呼びかけた。「逃げろ。早く、早く」。ところが、住民たちは海の方を何度もちらちらと目をやり、走るでもなくゆったりと歩くばかりだった。「早ぐ早ぐ早ぐ！」。いくら叫んでも歩きもせず、津波を眺めている人も。大和田さんの目には「ぽかんと津波を見てる」ように映った。

「信じられないようなことが起こると、人間は凍りついちまうんだって分かった。津波が百メートル離れてると、危ねえと思わね。十〜二十メートルで初めて危ねえと思うんだ」

周囲はあっという間に黒い水につかったので、大和田さんが呼びかけた住民たちは助かったようだ。だが、今となっては確かめようがない。大和田さんが消防団で担当する陸前高田市米崎町の一部には千七百〜千八百人が住んでいたが、七十人が亡くなり、二十人が今も行方不明だ。

少年野球の指導に十五年間携わった大和田さんは最近、避難はスポーツと同じなのかもしれないと感じるようになった。「守備や打撃の練習を積めば、考えなくても体が動くようになる。それが避難でもできれば」

撮影した津波の動画は今、インターネットのユーチューブで誰もが自由に視聴できるようにしている。外国のテレビ局から「欧州の独占放送権を二千万円で売ってくれないか」と打診されたが、断った。

「減災に役立てたいなんて偉そうなことは言いたくない」。ただ、映像を見た人が「津波のおっかなさを感じて、多くの人が死んだことを教訓にしてくれれば」と思っている。

注意報20分後 やっと避難

ソロモン沖地震 釜石で記者体験

今月六日、南太平洋ソロモン諸島沖でマグニチュード8の地震が発生し、日本各地で津波注意報が出された。その時、岩手県釜石市の被災地で取材していた記者は、仮設商店街の住民と避難する体験をした。

「津波注意報。海岸付近の方は、近くの高台か避難場所へ」。午後二時五十三分、がれきが残る釜石市の海岸で、携帯電話に市からの避難勧告がメールで届いた。携帯でテレビを見ると、「二〜三時間後に津波が日本に到達する」と伝えるテレビのアナウンサー。ただ、がれき撤去の重機やダンプカーはしばらく稼働を続けた。それを見て、思わず「みんな普通にしているし、避難の必要はないか」と考えた。

二十分後、海上保安庁の船がサイレンを鳴らして出港。防波堤を建設している作業員たちが船で避難をし始めたのが見えて、ようやく記者の気持ちも焦り始めた。

多くの住宅が流失した市街地は人がまばら。仮設商店街では、洋食店経営の阿部亀寿三（きじゅぞう）さん（七七）が避難準備をしていた。銀行通帳や現金をバッグに詰め込み、防寒着のウインドブレーカーを着込むと、「一緒に逃げよう」と声をかけてくれた。

今月6日、津波注意報を受け、防波堤再建工事の現場から一斉に避難する作業員＝岩手県釜石市で

五分ほど歩いて標高三十メートルほどの集会所へ。私たち二人のほかにそこに避難した人はいなかったが、「みんな高台の仮設住宅や学校の体育館とかに行ったんだろう。自分の年と体力を考えると、ここが一番」と阿部さんは話す。

午後九時すぎ、釜石港に到達した津波は高さ二〇センチで、被害はなかった。それでも、阿部さんは言う。「津波が来ないと分かっても、注意報が出たら、おれは逃げる。あのすげえ津波を忘れらんねっから」

（相坂穣）

「安全」と思い込む心理

正常性バイアスとは

東京女子大・広瀬弘忠名誉教授

南海トラフ地震を想定したハザードマップを作っても、地震の正確な予測ができたとしても、結局は日頃から備え、逃げる気持ちがなければ意味はない。東日本大震災でも、すぐ逃げずに犠牲になった人は多かった。人はなぜ、心にブレーキをかけてしまうのか。災害心理学が専門の東京女子大の広瀬弘忠名誉教授に聞いた。

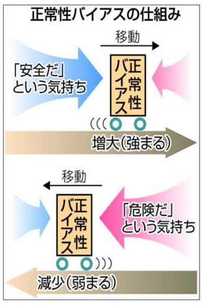
—正常性バイアスとはどんな心理か。

例えば、ビル内で火災報知機が鳴ったとする。フロアにいた人たちは顔を見合わせ、「故障だよな」「ちょっと様子を見てみようか」と話し合う。間違って鳴ることが多い火災報知機に、いちいち危険を感じていては日常生活に支障がある。だから、危険の可能性を無視してしまう。この心の働きが「正常性バイアス」と呼ばれる。

—危険のセンサーが働かなくなる。

私たちは今、比較的安全な社会に生きている。危険な事態が迫っても「安全だ」と思い込む気持ちが強い。不安を回避するため、「安全な社会に住む自分」の方に適応しようとする。健康診断で「再検査」と結果が出ても「これまで大丈夫だったから」と思うのと同じ。南海トラフ地震で「最大死者三十二万人」と推計が公表されたが、この受け止め方にも正常性バイアスは働く。「三十二万人が死んでも、自分はその中に入っていない」と思うのが現代人。

正常性バイアスの仕組み



—今月六日に津波注意報が出た時、釜石市で取材していた本紙記者は周りの作業員が逃げないのを見て、最初は「避難しなくてもいいか」と考えた。

周りが平静な状態だと、自分は安全な場所にいると誤解してしまう。この心の働きは「同調性バイアス」と呼ばれる。備えず、逃げない行動を後押ししてしまう二つ目の心の働きだ。

—昨年十二月、東北・関東で震度5弱の地震が起きた時、テレビのアナウンサーは「東日本大震災を思い出してください」「生きるために逃げてください」と切迫感のある口調で呼びかけた。

「何だ、大きな津波は結局、来なかった」と正常性バイアスを強めてしまうマイナス面もある。限られた回数しか使えない手法だ。分かっていること、判明していないことを冷静に伝えるのが最良の方法だ。

—具体的にはどうすればいいのか。

日頃、学校や会社で「この地域は最大で震度5弱の地震があり、高さ一〇メートルの津波が来る。その場合の避難場所は…」と伝えた上で、予告をしないで防災訓練をしたり、体育館に一晩泊まらせる、食べ物を何日か食べさせないなど「適度な不安」を与える取り組みをする。ある程度の不安は薬となる。正常性バイアスを破るため、不安を与えることを許容する必要がある。震災では「誰かが守ってくれる」ことは難しい。自分で身を守れるようにするべきだ。

次回は、3月4日に掲載します。

「備える！ 3・11から」販売中

本連載が「備える！ 3・11から」のタイトルで販売されています。2011年５月の連載開始から約１年間分を再構成し、ビジュアルで読みやすくまとめています。Ｂ５判、オールカラー、224ページ、定価1600円（税込み）。書店にない場合は中日新聞出版部＝電052（221）1714＝へ。

(c) .中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています